

源氏續本 夕顔の巻三



大和田建樹大人校訂

源氏讀本

夕顔の巻三

東京

跡見女学校藏版



夕顔の巻大要

源氏の君十七歳の夏より秋までの事にて。簀木の巻と同じ年なり。簀木の巻と此巻との間に空蟬の巻ありて。空蟬の君。軒端の萩などいふ人々の物語あれど。これには省く。されば此巻にも彼人々に關する事どもは。抜きたる多し。

此巻に出でたる人々左の如し。

源氏の君

大貳の乳母

惟光

惟光の母。

源氏の君の家臣にて家令の如き人。

阿闍梨

惟光の兄。

少將の命婦

六條の御息所

中將のねもと

夕顔の上

右近

左大臣

右大臣

惟光の妹。

桐壺帝の御兄君なる前皇太子

の妃殿下なりし君。

六條の御息所の官女。

三位中將たりし人の娘。

夕顔の上の侍女。

源氏の君の御舅。

頭中將の御舅。

源氏讀本三 夕顔の卷

大和田建樹校訂

六條わたりの御しのびありきのころ。内よりまかんで給ふ中やど
 りに。大貳のめのどのいたくわづらひて尼になりける。とやら
 はんとて。五條わたりの家たづねてはしたり。御車入るべき
 門はさしたりければ。人して惟光召させて。待たせ給ひけるほど。
 むつかしけなる大路のさまを。見渡し給へるに。この家のかたは
 らに。檜垣といふもの新しうして。かみは半部四五間ばかりあけ
 渡して。簾などもいと白う涼しけなるに。をかしき額つきの。す
 きかけあまた見わたのぞく。立ちさまよらん下つかた思ひやる
 に。あながちにたけたかき心地ぞする。いかなるものよつどへる
 ならん。やうかはりてはさる。

古今集

世の中はいづこかさして我ならんゆきとまるとぞ宿とさだむる

古今集旋頭歌

うちわたす遠方人に物まうすわれ其そこに白くさけるは何の花ぞも

御車もいたうやつし給へり。さきもればせ給はず。誰とか知らんと打ち解け給ひて。少しさしのぞき給へれば。門は葎のやうなるを押しあけたる。見いれの程なく物はかなきすまひを。あはれにいづこかさしてとれもほしなせば。玉の臺も同じことなり。きりかけだつものに。いと青やかなるかづらの。心地よけにはひかゝれるに。白き花ぞ。れのれひとりゑみの眉ひらけたる。をちかた人に物まうすと。ひとりごち給ふを。御隨身ついで。かの白くさけるをなん夕顔と申し侍る。花の名は人めきて。かうあやしき垣根になん咲き侍りける。と申す。けいにいと小家がちにむつかしけなるわたりの。このもかのあやしう打ちよるほひて。むねくしからぬ軒のつまごどに。はひまつはれるを。くちをしの花のちぎりや。一房をりて参れとの給へば。このれしあけたる

門に入りて折る。さすかにされたる遣戸口に。黄なるすゞしの單袴。長く着なしたる童のをかしけなる。出で来て打ちまねく。白き扇のいたうこがしたるを。これに置きて参らせよ。枝もなさけなけなんめる花をとて。取らせたれば。門あけて惟光の朝臣の出で來たるして。奉らす。かぎを置きまどはし侍りて。いとふびんなるわざなりや。物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬわたりなれど。らうがはしき大路に立ちおはしましてと。かしてまり申す。引き入れてれり給ふ。惟光が兄の阿闍梨。婿の參河の守。むすめなど渡りつどひたる程にて。かくればしましたるよろこびを。またなき事にかしこまる。尼君も起きあがりて。惜しけなき身なれど。捨て難く思ひ給へつることば。唯かく御前にさぶらひ御覽せらるゝ事の。かばり侍り

なんことを。くちをしう思う給へたゆたひしかど。忌む事いむことのしるししるしによみがへりてなん。かく渡りればしますを見給へ侍りぬれば。今なん阿彌陀ほとけの御光も。心ぎよく待たれ侍るべき。など聞きひて。よわけに泣く。

日ごろこれたりがたく物せらるゝを。安からず歎きわれりつるに。かく世を離るゝさまに物し給へば。いとあはれにくちをしうなん。命ながくて。猶位たかくなども見なし給へ。さてころ九品のかみにも。さはりなく生れ給はめ。この世に少しうらみのこるは。わろきわざとなん聞くなど。涙ぐみてのたまふ。

かたはなるをだに。乳母などやうの思ふべき人は。あさましうまはに見なすものを。ましていとれもたしう。なづさひつかうまつりけん身もいたはしく。かたじけなくれもほゆべかんめれば。

古今集
よの中にさ
らぬ別のな
くもがな千
代もと祈る
人の子のた
め

すゝろに涙がちなり。子どもはいと見苦しと思ひて。背そむきぬる世の去り難きやうに。みづからひろみ御覽ぜられ給ふと。つきじろひめくはす。

君はいとあはれとれほして。いわけなかりけるほどに。思ふべき人々の打ち捨てゝものし給ひける名残。はやくむ人あまたあるやうなりしかど。親しく思ひむつおるすぢは。またなくなんれもほほし。人となりて後は限あれば。朝夕にしも見奉らず。心のまゝにとおらひまうづる事はなけれど。猶久しう對面せぬ時は。心ほろくれほゆるを。さらぬ別はなくもがなとなんなど。こまやか

に語らひ給ひて。押し拭ひ給へる御袖のにはひも。いと所せきまでかをり満ちたるに。けに世に思へば。れしなべたらぬ人の御すくせぞかしと。尼君をもどかしと見つる子ども。皆うちしほた

修法など又々始むべきことなど。れきてのたまはせて。出で給ふ
 とて。惟光にしろく召して。ありつる扇御覽すれば。もてならし
 たる移香。いとしみ深うなつかしうて。をかしうすさび書きたり。
 心あてにうれかどぞ見るしら露の。ひかりろへたる花の夕が
 は。うこはかどなく書きまぎらばしたるも。あてはかにゆるづき
 たれば。いと思の外にをかしうれは給ふ。
 惟光に。この西なる家には何人の住むぞ。問ひ聞きたりやどのた
 まへは。例のうるさき御心とは思へども。さは申さず。この五
 日六日こゝに侍れど。ほうぎの事を思ひ給へあつかひ侍るほどに。
 隣の事は聞き侍らずなど。はしたなけに聞ゆれば。にくしとこ
 ろ思ひたれな。されどこの扇の尋ぬべきゆるありて見ゆるを。猶

夕顔

このあたりの心知れらん者を召して問へ。どのたまへは。入りて
 この宿守なる男を呼びて。問ひ聞く。
 揚名の介なりける人の家になん侍りける。男は田舎にまかりて。
 女なん若く事好みて。はらからなど宮仕人にて。來通ふと申す。
 くはしき事は下人の知り侍らぬにやあらんと聞ゆ。さらばろの
 宮仕人なんなり。したり顔に物なれていへるかなど。めざましか
 るべきよはにやあらんと思せど。さして聞かされる心の。にく
 からず過しがたきぞ。例のこのかたには重からぬ御心なんめるか
 し。御たうがみに。いたうあらぬさまに書きかへ給ひて。
 よりてころうれかとも見めたるがれに。ほのく見つる花の
 夕顔。ありつる御隨身してつかはす。
 まだ見ぬ御さまなりけれど。いとしく思ひあてられ給へる御う

はめを。見すらさやさし驚かしけるを。御いらへもなく程へけれ
 は。なまはしたなきに。かくわざとめかしければ。あまへて。い
 かに聞ゆるなどいひしろふべかんめれど。めさましと思ひて隨身
 は参りぬ。
 御さきの松ほのかにて。いと忍びて出で給ふ。半蔀はれろしてけ
 り。ひまどより見ゆる火の光。螢よりけにはほのかにあはれなり。
 御志ざしの所には。木立前裁などなべての所に似ず。いとどか
 に心にくく住みなし給へり。
 うちどけぬ御有様などの。けしき異なるに。ありつる垣根れもほ
 し出でらるべくもあらずかし。
 つとめて少し寐過し給ひて。日さし出づる程々に出で給ふ。朝け
 の御姿は。けに人のめで聞ゆるも。ことわりなる御さまなりけり。

るん

今日もこの蔀の前わたりし給ふ。來し方も過ぎ給ひけんわたりな
 れど。たゞはかなき一ふしに御心とまりて。いかなる人のすみか
 ならんとは。ゆきしに御目とまり給ひけり。
 惟光日ごろありて参れり。わづらひ侍る人猶よわけに侍れば。と
 かく見給へあつかひてなんなど聞ゆる。近く参り寄りて聞ゆ。仰
 せられし後なん。隣の事知りて侍るもの呼びて。問はせ侍りしか
 ど。はかしくも申し侍らず。いと忍びてさつきのところはひよ
 り。物し給ふ人なんあるべけれど。その人とは。更に家の内の人
 にだに知らせずとなん申す。時々中垣のかいまみし侍るに。けに
 若き女どものすきかけ見れば。褶だつものかごとはかり引き
 かけて。かしづく人侍るなんめり。昨日の夕日のこりなくさし入
 りて侍りしに。文書くとして居て侍りし人の。顔ころいとよく侍り

しか。物思へるけはひして。ある人々も忍びてうち泣くさまなど
 なん。しるく見侍ると聞ゆ。君うちるみ給ひて。知らはやとれ
 もほしたり。
 もし見給へうる事もや侍ると。はかなきついで作り出で。消息
 など遣したりき。書き馴れたる手して。口とく返事などし侍りき。
 いと口惜しうはあらぬわかうどもなん侍るめる。と聞ゆれば。猶
 いひよれ。尋ね知らではさうとくしかりなるとのたまふ。かの下
 が下と人の思ひ捨てしすまひなれど。ろの中にも思の外に口惜し
 からぬを。見つけたらんと。珍しうれもほすなりけり。
 秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに。思ほし亂るゝ事どもあ
 りて。れはい殿には絶間置きつゝ。うらめしうのみ思ひ聞給へ
 り。

六條あたりにも解け難かりし御けしきを。れもむけ聞給ひて後。
 ひきかへしなのめならんはいとほしかし。されどよろなりし御心
 まごひのやうに。あながちなる事はなきも。いかなる事にかと見
 ねたり。
 霧のいと深きあした。いたくろゝのかされ給ひて。ねおたけなる
 けしきに。うち歎きつゝ出で給ふを。中將のれもと。御格子一間
 上げて。見奉り送り給へとれほしく。御几帳引きやりたれば。み
 ぐしもたけて見出だし給へり。前裁のいろく亂れたるを。過ぎ
 がてにやすらひ給へるさま。けにたぐひなし。
 廊の方へればするに。中將の君も御供に參る。紫苑色の折にあひ
 たるうすもの裳。あざやかに引きゆひたる腰つき。たをやかに
 なまめきたり。

見かへり給ひて。隅の間の高欄に暫し引きすゑ給へり。打ち解け

たらぬもてなし。髪のがりば。めきましくも見給ふ。
咲く花にうつるてふ名はつゝめごも。折らで過ぎうきけさの

朝顔。いかゞすべきて手をこらへ給へれば。いさなれてこく。

朝霧のはれまもまたぬけしきにて。花にこゝろをこめぬこぞ

見る。こたほやけごにぞ聞けなす。をかしげなる侍童の。姿こ

のましうこささらめきたる。指貫の裾露けに。花の中にまじり

て。朝顔折りて参るほごなど。繪にかゝまほしげなり。

大方に打ち見奉る人だに。心しめ奉らぬはなし。物のなさけ知ら

ぬ山賤も。花の陰には猶やすらはまほしきにや。この御光を見奉

るあたりは。ほごくにつけて。我かなしと思ふむすめを。仕う

まつらせばやご願ひ。若しは口惜しからずと思ふ妹なごもたる人

は。賤しきにて。猶この御あたりにさぶらはせんご。思ひよらぬ

はなかりけり。

ましてさりぬべきついでの御言の葉も。なつかしき御けしきを見

奉る人の。少し物の心を思ひ知るは。いかゞはわろかに思ひ聞ぬ

ん。明暮うち解けてしもたはせぬを。心もごなき事に思ふべかん

めり。

まここやかの惟光があづかりのかいまみは。いさよくあない見取

りて申す。ろの人ごは更に思ひより侍らず。人にいみじく隠れ

忍ぶるけしきになん見侍るを。つれづれなるまゝに。南の半蔀

ある長屋にわたり来つゝ。車の音すれば。若きものごものぞきな

ごすべかんあるに。このしうこたほしきも。はひわたる時侍るべ

かんめり。かたちなん。ほのかなれご。いごらうたげに侍る

一日さきたひてわたる車の侍りしをのぞきて。わらはべの急ぎ來て。右近の君こそまづ物見給へ。中將殿こそこれより渡り給ひぬれごいへば。又よろしきたごな出で來て。あなかまご手かくものから。いかできは知るぞ。いで見んこてはひわたる。打橋だつもの道をてなん通ひ侍る。急ぎくるものはきぬの裾を物に引きかけて。よろほひたふれて。橋よりも落ちぬべければ。いでこの葛城の神ころ。さかしうしたきたれごむつかりて。物のぞきの心もさめぬめり。君は御直衣姿にて。御隨身ごもゝありし。なにがしくれがしご數へしは。頭の中將の隨身。ろの小舎人童をなん。しるしにいひ侍りしなご聞ゆれば。たしかにろの車をぞ見ましごの給ひて。もしかのあはれに忘れざりし人にやご。思ほしよるも。いご知らまほしげなる御けしきを見て。私の懸想もいごよくした

きて。案内も残る所なく見給へ置きながら。唯我どちご知らせて。物なごいふ若きたもこの侍るを。そらたほれしてなんはかられまかりありく。いごよく隠したりご思ひて。小さき子ごもなごの侍るが。ここあやまちしつべきもいひまぎらはして。又人なきさまをしひてつくり侍るなど。かたりて笑ふ。

尼君のごふらひにもものせんついでに。かいまみせさせよとの給ひけり。假にても宿れるすまひのほごを思ふに。これこそ。かの人アトイの定めあなづりし下の品ならめ。その中に思の外にをかしき事もあらば。なご思ほすなりけり。

惟光いさゝかの事も御心に違はじと思ふに。たのれも隈なきすぎごゝろにて。いみじくたばかりまごひありきつゝ。忍びてたはしまさせそめてけり。この程の事くだくしければ。例のもらこつ。

女をさしてその人と尋ね出で給はねば。我も名のりをし給はで。
いとわりなうやつれ給ひつゝ。例ならずたり立ちありき給ふは。
たろかには思されぬなるべしと見れば。我馬をば奉りて。御供に
走りありく。懸想人のいと物けなき足もこを見つけられて侍らん
時。辛くもあるべきかなとごわおれど。人に知らせ給はぬまゝに。
かの夕顔のしるべせし隨身ばかり。さては顔むげにあざむしるまじき童
一人ばかりぞ。ゐてたはしける。
もし思ひよるけしきもやこて。隣に中宿をだにし給はず。女はい
こあやしう心得ぬ心地のみして。御使に人を添へ。暁の道をうか
ゞはせ。御ありか見せんご尋ぬれど。そこはかこなく惑はしつゝ。
さすがはあはれに見ではぬあるまじく。この人の御心にかゝりた
れば。びんなく軽々しき事ごもたもほしかへしわびつゝ。いとし

ほくたはします。

かゝるすぢは。まめまの亂るゝ折もあるを。いとめやすくしづめ
給ひて。人のごがめ聞ゆべきふるまひはし給はざりつるを。あや
しきまで。今朝のほご晝間のへだても覺束なくあやなご。思ひわづら
はれ給へば。かつはいと物ぐるほしく。さまで心こゝむべき事の
さまにもあらずと。いみじく思ひさまし給ふに。人のけはひ。い
とあさましくやはらかにたほごきて。物深く重き方はれくれて。
ひたふるに若びたるものから。世をまだ知らぬにもあらず。いと
やんごとなきにはあるまじ。いづくにいとかくしもとまる心ぞと。
かへすゝればす。
いとことさらめきて。御装束をもやつれたる狩の御衣を奉り。さ
まをかへ顔をもほの見せ給はず。夜深きほどに人をしづめて出で

入りなどし給へは。昔ありけん物のへんげめきて。うたて思ひ歎
 かるれど。人の御けはひはた。手さぐりにもしるきわざなりけれ
 は。誰はかりにかはあらん。猶このすきものしいでつるわざな
 んめりと。太夫を疑ひながら。せめてつれなく知らず顔にて。か
 けて思ひよらぬさまに。たゆまずあざれありけは。いかなる事に
 かと心得がたく。女がたもあやしう。やう違ひたる物れもひをな
 んしける。
 君もかくうらなくたゆめて。はひかくれなは。いづくをはかりと
 か我も尋ねん。かりそめのかくれがとばた見ゆめれは。いづかた
 にもうつろひ行かん日を。いつとも知らじとれほすに。追ひ惑は
 して。なのめに思ひなしつべくは。唯かほりのすさびにても過ぎ
 ぬべきことを。更にさて過してんとれほされず。人めをれほして

隔て置き給ふよなくなどは。いと忍びがたく。苦しきまで思ほ
 せ給へは。猶誰となくて二條の院に迎へてん。若し聞えありてび
 んなかるべき事なりとも。さるべきにこそは。我心ながらいとか
 く人にしむことはなきを。いかなる契にかはありけんなど。思ほ
 しよる。

いざいと心やすき所にて。のどかに聞えんなど語らひ給へは。猶
 あやしう。かくの給へど。世づかぬ御もてなしなれば。物恐ろし
 くこそあれど。いと若びていへは。げにとほゝ急まれ給ひて。げ
 にいづれか狐ならんな。唯はかられ思へかしと。なつかしげにの
 たまへは。女もいみじく靡きて。さもありぬべう給ひたり。
 よになくかたばならん事なりとも。ひたふるにしたがふ心は。い
 どあはれげなる人と見給ふに。猶かの頭の中將のどこなつ疑はし

く。語りし心さまづ思ひいでられ給へど。忍ぶるやうこそはと。
 あながちにも問ひはて給はず。けしきはみてふと背き隠るべき心
 さまなどはなけれは。かれづにどだ置かん折こそは。さやう
 に思ひかはることもあらめ。心ながらも少しうつろふ事あらんこ
 そ。あはれなるべけれどさへれもほしけり。
 八月十五夜。くまなき月かけ。ひまればかる板屋のこりなく漏り
 来て。見習ひ給はぬすまひのさまもめづらしきに。曉近くなり
 けるなるべし。隣の家々。あやしき賤の男の聲々。目さまして。
 あはれいと寒しや。今年こそなりはひにも頼む所すくなく。田舎
 の通ひも思ひかけねはいと心ほそけれ。北殿こそ聞き給ふやなど。
 言ひかはすも聞ゆ。いとあはれなるれのがじのいとなみに。起
 き出でよそめきさわぐも程なきを。女いと耻かしく思ひたり。

わんだちけしきはまん人は。消ゆる入りぬべきすまひのさまなん
 めりかし。されどのどかに。つらきもうきもかたばらいたきこと
 も。思ひ入れたるさまならで。我もてなしありさまは。いとあては
 かにこめかしくて。またなくらうがはしき隣の用意なきを。いか
 なる事とも聞きしりたるさまならぬは。なか／＼恥ぢか／＼やかん
 よりは。罪ゆるされてぞ見ゆける。
 こほくと鳴る神よりもれどろ／＼しく。踏み轟かすからうすの
 音も。枕上とればゆ。あな耳かしがましと。これにぞればさるゝ。
 何の響とも聞き入れ給はず。いとあやしう目さましき音なひとの
 み聞き給ふ。くだ／＼しき事のみ多かり。白妙の衣うつ砧の音も。
 かすかにこなたかなた聞きわたされ。空飛ぶ雁の聲。取り集めて
 忍びがたき事多かり

端近きれましどころなりければ。遣戸を引きあげ給ひて。諸共に
 見出だし給ふ。程なき庭にぞれたる吳竹。前栽の露は。猶かゝる
 所も同じとどきらめきたり。虫の聲々みだりがはしく。壁の中の
 きりゝすだに。間遠に聞きならひ給へる御耳に。さしあてたる
 やうに鳴き亂るゝを。なかくさまかへてればさるゝも。御志一
 つの淺からぬに。萬の罪ゆるさるゝなんめりかし。
 しろきあはせ。薄色のなよゝかなるを重ねて。花やかならぬ姿。
 いとらうたげにあはかなる心地して。そこと取り立てゝすぐれた
 る事もなけれど。細やかにたをくとして。物うちいひたるけは
 ひ。あな心苦しど。唯いとらうたく見ゆ。心ほみたる方を少し添
 へたらほど。見給ひながら。なほ打ちとけて見まほしくればさる
 れは。いざたゞこのわたり近き所に。心安くて明かさん。かくて

のみはいと苦しかりけりとのたまへば。いかでか俄ならんと。い
 とれいらかにいひて居たり。
 この世のみならぬ契などまでたのめ給ふに。うち解くる心ばへな
 ど。あやしくやうがはりて。世なれたる人どもればねは。人の
 思はん所もねはゞかり給はで。右近を召し出で。隨身を召させ
 給ひて。御車引き入れさせ給ふ。このある人々も。かゝる御志の
 れろかならぬを見知れば。れほめがしなから。頼をかけ聞わたり。
 明方も近うなりにけり。鳥の聲などは聞わで。御嶽さうじにやあ
 らん。唯翁びたる聲にぬかづくぞ聞ゆる。立居のけはひ堪へがた
 げに行ふ。いとあはれに。朝の露に異ならぬ世を。何を貪る身のい
 のりにかと。聞き給ふに。なも當來の導師とぞ拜むなる。
 かれ聞き給へ。この世のみは思はざりけりど。あはれがり給ひ

カト
カト
カト
カト
カト
カト
カト
カト
カト
カト

て。
優婆塞が行ふみちをしるべにて。來ん世も深きちぎりたがふな。
長生殿のふるきためしはゆゝしくて。はねをかはさんとは。ひま
かへて。彌勒の世をぞかね給ふ。行先の御たのめいとこちたし。
さきの世のちぎり知らるゝ身のうさに。行末かねて頼みがた
さよ。かやうのすぢなども。さるは心もとなかんめり。
いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを。女は思ひやすらひ。
どかくのたまふほどに。俄に雲がくれて明け行く空。いとをか
し。
はしたなき程にならぬさきにと。例の急ぎ出で給うて。輕らかに
うちのせ給へれば。右近ぞ乗りける。
そのわたり近きなにかしの院にればしつきて。あづかり召し出づ

るほど。荒れたる軒のしのお草しげりて見上げられたる。たとし
へなくこぐらし。霧も深く露けきに。簾をさへ上げ給へれば。御
袖もいたうぬれにけり。まだかやうなることを習はざりつるを。
心づくしなる事にもありけるかな。
いにしへもかくやは人のまどひけん。わがまだ知らぬしの
めの道。ならひ給へりやこのたまふ。女はちらひて。
山の端のころもしらで行く月は。うはの空にてかけや絶は
なん。心ほそくとて。物れそろしうすでけに思ひたれば。かのさ
しつどひたるすまひの心習ならんと。をかしうれはず。
御車入れさせて。西の對にれましなどよそふほど。勾欄に御車ひ
きかけて立ち給へり。右近ねんなる心地して。きし方の事なども。
人知れず思ひ出でけり。あづかりいみじくけいめいしてありけ

しきに。この御ありさま知りばてぬ。
はのふと物見ゆるほどに。れり給ひぬめり。假初なれど清げに
しつらひたり。

御供に人もさぶらはざりけり。ふびんなるわざかなとて。むつま
しき下家司にて。殿にも仕うまつるものなりければ。参りよりて。
さるべき人めすべきにやなど申さすれど。殊更に人くまじきかく
れがもとめたるなり。更に心より外にもらすなど。口がためさせ
給ふ。

御粥など急ぎ参らせたれど。取りつぐ御まかなひ打ち合はず。ま
だ知らぬ事なる御旅寐に。れきなが川と契り給ふより外のことな
し。
日たくる程に起き給ひて。格子手づからあげ給ふ。いといたく荒

万葉集
鴉鳥のおき
なが川は絶
ぬぬとも君
にかたらふ
ことつさめ
やは

れて。人目もなく遙々と見渡されて。木立いと疎ましう物ふりた
り。けちかき草木などは殊に見どころなく。皆秋の野らにて。池
もみくさに埋もれたれば。いとけうとけなり。納別のかたにぞ曹
子などして。人住むべかんめれど。こなたはなれたり。けうと
くもなりにける所かな。さりとも鬼なども。我をは見ゆるしてん
どのたまふ。

顔は猶隠し給へれど。女のいとつらしと思へれば。ゆにかほかり
にてへだてあらんも。事のみ違ひたりとれほして。

夕露にひもとく花は玉ほこの。たよりに見ゆしゆにこそあり
けれ。露のひかりやいかほどの給へば。しりめに見れこせて。

ひかりありと見し夕顔のうは露は。たそがれ時のそらめなり
けり。とほのかにいふ。をかしとれほしなす。

げにうちとけ給へるさま世になく。所がらまいてゆゝしきまで見
給ふ。

盡せずへだて給へるつらさに。あらはさじと思ひつるものを。今
だに名のりし給へ。いとむくつけしとのたまへど。海士の子なれ
ばとて。さすがにうちとけぬさま。いとあいだれたり。よしこれ
も我からなんめりと。うらみかつは語らひくらし給ふ。

惟光尋ね聞て。御くだものなど参らす。右近がいはんこと。さ
すがにいとほしければ。近くもねさぶらひよらず。かくまでたど
りありき給ふもをかしう。さもありぬべき有様にこそはと。推し
はからるゝにも。わがいとよく思ひよりぬべかりしことを。譲り
聞て心ひろさよなど。めざましう思ひ居り。
たとしへなく靜なる夕べの空をながめ給ひて。奥の方は暗う物

朗詠集

白波の上す
るなぎさに
世をつくす
海士の子な
れば宿もさ
だめす
今古集
あまの刈る
藻に住む虫
のわかれか
らと身をこ
そなかめ世
をば恨みじ

むつかしと女の思ひたれば。端の簾をあけて添ひ臥し給へり。夕
ほのを見かばして。女もかゝるありさまを。思の外にあやしき心
地はしなから。萬のなげき忘れて。少し打ちとけゆくけしき。
いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮らして。物をいとれそろ
しと思ひたるさま。若う心ぐるし。

格子とくれろし給ひて。れほどなぶら参らせて。名残なくなり
たる御有様にて。猶心の内のへだて残し給へるなんつらきと。う
らみ給ふ。

内にいかに求めさせ給ふなんを。いづこに尋ぬらんとれほしやり
て。かつはあやし心の心や。六條あたりにも。いかに思ひ亂れ給ふ
らん。うらみられんも苦しう。ことわりなりと。いとほしきすぢ
は。まづ思ひ出で聞給ふ。何心もなきさしむかひを。あはれと

ればすまゝに。あまり心深く。見る人も苦しき御有様を。少し取り捨てはやとぞ。思ひくらべられ給ひける。

宵過ぐるほどに少し寐入り給へるに。御枕上にいとをかしかしける女居て。れのがいとめでたしと見奉るをは。尋ねもおもほさで。

かくことなる事なき人をあてればして。時めかし給ふころ。いとめざましくつらけれとて。御かたはらの人をかき起さんとすと見給ふ。

物にれろはるゝ心地して驚き給へれば。火も消ぬにけり。うたてればさるれば。太刀を引き抜きて。うち置き給ひて。右近を起し給ふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて参りよれり。

渡殿なるとのるひと起して。しろうさとして参れといへとの給へばいかでかまからん。くらうてといへば。あな若々しと打ち笑ひ給

ひて。手をたゝき給へば。山彦の答ふる聲。いとうとまし。

人は聞きつけて参らぬに。この女君いみじうわなゝきまどひて。いかさまにせんと思へり。汗もしとゝになりて。われかのけしきなり。物れちをなんわりなくせさせ給ふ御ほんじやうにて。いかればさるゝにかと。右近も聞ゆ。

いとかよわくて。晝も空をのみ見つるものを。いとほしとればして。われ人をれこさん。手たゝけは。山彦の答ふるいとうるまし。こゝにしほし近くとて。右近を引き寄せ給ひて。西の妻戸に出でゝ。戸を押しあげ給へれば。渡殿の火も消ぬにけり。

風少し打ち吹きたるに。人は少くて。さぶらふかぎり皆ねたり。この院のあづかりの子の。むつましくつかひ給ふ若き男。又うへわらはひとり。例の隨身ばかりぞありける。

召せば御答して起きたれば。しそくさしてまゐれ。隨身も弦打して絶えずこわづくれと仰せよ。人はなれたる所に心とけていぬるものか。惟光の朝臣の來りつらんほど。問はせ給へば。さぶらひつれど。仰事もなし。曉に御迎に參るべきよし申してなんまかんで侍りぬる。ときこゆ。このかう申すものは瀧口なりければ。弓弦いとつきとしく打ち鳴らして。火危しといふく。あづかりが曹子のかたへいぬるなり。内をればしやりて。名對面は過ぎぬらん。瀧口のどのゐまうし今ころど。推しばかり給ふは。まだいたう更けぬにころは。歸り入りて探り給へば。女君はさながら臥して。右近はかたばらにうつふし臥したり。こはなぞ。あなもののゑるほしの物れちや。荒れたる所は。狐など

やうのものゝ人れびやかさんどて。けれそろしう思はするならん。まろあれば。さやうの物にはれどされじどて。引き起し給ふ。いさうたて。みだり心地の悪しう侍れば。うつふし臥して侍るなり。御前にこそわりなくればさるらめといへば。そよ。などかうはどて。かい探り給ふに。息もせず。引き動かし給へど。なよなよとして。我にもあらぬさまなれば。いといたくわかびたる人にて。物にけごられぬるなんめりと。せんかたなき心地し給ふ。しろうもて參れり。右近も動くべきさまにもあらねば。近き御几帳を引き寄せて。猶もてまゐれどのたまふ。例ならぬことにて。御前近くもね參らぬつゝましさに。なけしにもねのほらす。猶もてこや。所に從ひてころこて。召し寄せて見給へば。唯この枕上に。夢に見ゆつるかたちしたる女。面影に見ゆてふと消ゆ失

せぬ。

昔物語などにこそかゝる事はきけこ。いこめづらかにむくつけれど。まづこの人いかになりぬるぞと。れもほす心さわぎに。身の上も知られ給はず。添ひ臥して。やゝと驚かし給へど。たゞひねにひね入りて。息はとく絶はてにけり。いはんかたなし。たのもしくいかにと。いひふれ給ふべき人もなし。法師などをころは。かゝる方のたのもしきものにはたほすべけれど。さころ心強がり給へど。若き御心地にて。いふかひなくなりぬるを見給ふに。やる方なくて。つと抱きて。あが君生き出で給へ。いみじきめな見せ給ひそとのたまへど。ひね入りたれば。けはひ物うくなり行く。右近は唯あなむつかしと思ひける心地。皆さめて。泣きまどふとまいといみじ

南殿の鬼の。なにがしのれとをれびやかしたるためしを。れほし出で。心づよく。さりともいたづらになりはて給はじ。夜の聲はれどろくし。あなかまこいさめ給ひて。いこあわたしきにあきれたる心地し給ふ。

この男を召して。こゝにいこあやしう。物にれそはれたる人の惱ましけなるを。只今惟光の朝臣の宿れる所にまかりて。急ぎ参るべきよしへこ仰せよ。なにがしの阿闍梨そこにもものする程ならば。こゝに來べきよし忍びていへ。かの尼君などの聞かんに。れどろくしくいふな。かゝるありきゆるさぬ人なりなど。物のたまふやうなれど。胸ふたがりて。この人を空しくしなしてんこと。いみじくればさるゝに添へて。大方のむくくしさ。譬へんかたなし。

夜中も過ぎにけんかし。風や、荒々しう吹きたるは。まして松の
ひゞき木おかく聞にて。けしきある鳥のからこゑになきたるも。
梟はこれにやとれほゆ。うち思ひめぐらすに。こなたかなたけど
ほくうとまじきに。人聲せず。などでかくはかなきやどりは取り
つるぞと。悔しさもやらんかたなし。

右近は物もれほせず。君につと添ひ奉りて。わな、き死ぬべし。
又これもいかならんこ。心うらにてとらへ給へり。我ひとりさか
しき人にてれほしやる方ぞなきや。

火はほのかにまたゝきて。母屋のきはに立てたる屏風のかみ。こ
ゝかしこのくまゝしく見ゆるに。物の足音ひしく、こ踏み鳴ら
しつゝ。うしろより寄りくる心地す。惟光こく参らなんとれほす。
ありか定めぬものにて。こゝかしこ尋ねけるほどに。夜の明くる

程の久しさ。千夜を過さん心地し給ふ。

辛うじて鳥の聲遙に聞ゆるに。命をかけて何の契に。かゝるめを
見るらん。我心ながら。かゝるすぢに。れほけなくあるまじき心
のむくいに。かくきし方ゆくさきのためしこなりぬべき事はある
なんめり。忍ぶとも世にある事隠れなくて。内に聞し召されんこ
とを初めて。人の思ひいはん事。よからぬわらはべの口ずさびに
なりぬべきなんめり。ありくゝてをこがましき名を取るべきかな
と。れほしめぐらす。

からうじて惟光の朝臣参れり。夜中曉といはず御心にしたがへる
のゝ。今宵しもさぶらはで。召しにさへ怠りつるをにくしと思ほ
すものから。召し入れて。のたまひ出でん事のあへなきに。ふこ
物もいはれ給はず。

右近大夫のけはひ聞くに。初よりの事。うち思ひ出でられて泣くを。君もに堪へ給はで。我ひとりさかしがり抱き持ち給へりけるに。この人に息をのべ給ひてぞ。悲しき事もれほされける。こばかりいこいたく。ねもごめず泣き給ふ。やゝためらひて。こゝにいこあやしき事のあるを。あさましこいふにも餘りてなんある。かゝるこみの事には。誦經などをこそばすなれこて。その事どもせさせん。願なごも立てさせんこて。阿闍梨ものせよと言ひやりつるはこ。のたまふに。昨日山へまかりのほりにけり。まづいこめづらかなる事にも侍るかな。かねて例ならず。御心地の物せさせ給ふ事や侍りつらん。さる事もなかりつこて。泣き給ふさま。いこをかしけにらうたく。見奉る人もいと悲しくて。れのれもよゝ泣きぬ。

さいへど。年うちねび。世の中のとある事もしほじみぬる人こそ。物のをりふしはたのもしかりけれ。いづれもく若きごちにて。言はん方もなけれど。この院守などに聞かせんこは。いとびんなかるべし。この人ひとりこそむつまじうもあらめ。おのづから物いひもらしつべき眷屬も立ちまじりたらん。まづこの院を出でたはしましねこいふ。さてこれより人ずくなゝる所は。いかでかあらんこのたまふ。けにさぞ侍らん。かのふるさこは。女房などのかなしびに堪へず。泣き惑ひ侍らんに。隣しゆくこがむる里人多く侍らんに。おのづから聞け侍らんを。山寺こそ。猶かやうの事たのづから行きまじり。物まざるゝこ侍らめこ。思ひまはして。むかし見給へし女房の尼にて侍る。ひんがし山のへんに移し奉らん。惟光が父の朝

臣の乳母にはべしもの。みつはらみて住み侍るなり。あたりは
人しげきやうに侍れど。いごかかにかに侍りご聞にて。明け離るゝ
程のまぎれに御車寄す。

この人をいひだき給ふまじければ。うはむしろに押しくゝみて。
惟光のせ奉る。いごさゝやかにて。うとましげもなくらうたげな
り。したゝかにしもいせねは。髪はこほれ出でたるも。目くれま
ごひて。あさましう悲しとれほせば。なりはてんさまを見んこれ
ほせど。はや御馬にて二條の院へたはしまさなん。人騒がしくな
り侍らぬ程にとて。右近を添へてのすれば。君に馬は奉りて。我は
かちより。くゝり引き上げなどして出で立つ。かつはいとあやし
く覺ぬれくりなれど。御けしきのいみじきを見奉れば。身を捨
てゝ行くに。君は物もれほに給はず。われかのさまにてたはし着

きたり。

人々いづこよりたはしますにか。なやましげに見ゆさせ給ふなど
いへど。御帳の内に入り給ひて。胸をたさへて思ふにいといみじ
ければ。なごて乗り添ひて行かざりつらん。生きかへりたらん時。
いかなる心地せん。見捨てゝいきわかれにけりと。つらくや思は
んと。心まごひの中にもたほすに。御胸せきあぐる心地し給ふ。
みぐしも痛く身もあつき心地して。いと苦しくまごはれ給へば。
かくはかなくて。我もいたづらになりぬるなんめりごたほす。
日高くなれど起き上り給はねば。人々あやしがりて。御粥なごそ
ゞのかし聞ゆれど。いと心細くたほさるゝに。内より御使あり。
昨日もに尋ね出で奉らざりしより。覺束ながらせ給ふ。
たほい殿のきんだち参り給へど。頭の中將ばかりを。立ちながら

こなたに入り給へどのたまひて。御簾の内ながらのたまふ。乳母
 にて侍るもの。このさつきのころはひより重くわづらひ侍りし
 が。頭そり忌む事受けなどして。そのしるしにやよみがへりたり
 しを。このごろ又起りて弱くななりける。今一度とあらひ見
 よと申したりしかば。いときなきよりなづさひしもの。今はの
 きさみにつらしとや思はんと。思ひ給へてまかりしに。その家な
 りける下びこの病しけるが。俄にいとあへでなくなりけるを。
 わちはさかりて。日をくらしてなん取り出で侍りけるを。聞きつ
 け侍りしかば。神わざなるころは。いとふびんなる事と思ふ給へ
 かしこまりて。は参らぬなり。この曉より。しばおきやみにや侍
 らん。頭いと痛くて苦しく侍れば。いとむらいにて聞ゆる事など
 のたまふ。

中將さらはさるよしをこそ奏し侍らめ。よべも御あろびにかしこ
 く求め奉らせ給ひて。御けしきあしく侍りきと。聞に給ひて。立
 ちかへり。いかなるいきふれにかよらせ給ふぞや。のべやらせ給
 ふ事こそ。誠とも思ふ給へられねといふに。胸うちつおれ給ひて。
 かくこまかにはあらで。唯覺ぬけがらひに觸れたるよしを奏し
 給へ。いとこそたいしく侍れと。つれなくのたまへど。心の
 内には。いふかひなく悲しき事をたはすに。御心地もなやましけ
 れは。人に目も見あはせ給はず。藏人の辨を召し寄せて。まめや
 かにかゝるよしを奏せさせ給ふ。れはい殿などにも。かゝる事あ
 りて参らぬ御消息など。聞に給ふ。
 日暮れて惟光参れり。かゝるけがらひありどのたまひて。参る人
 々も皆立ちながらまかんづれば。人しげからず。召しよせて。い

かにぞ今はと見はてつやとのたまふまゝに。袖を御顔に押しあて
泣き給ふ。

惟光もなくく。今はかぎりこそは物も給ふめれ。長々と籠り
侍らんもびんなきを。明日なん日よろしく侍れは。とかくの事。
いと尊き老僧のあひ知りて侍るに。言ひ語らひつけ侍りぬると聞
ゆ。添ひたりつる女はいかにどのたまへは。うれなん又はいくま
じう侍るめる。我もれくれじと惑ひ侍りて。今朝は谷にも落ち入
りぬべくなん見給へつる。かのふるさとの人に告げやらんと申せ
ど。暫し思ひしづめよ。事のさま思ひめぐらしてとなん。こしら
へ置き侍りつると。語り聞ゆるまゝに。いといみじとれはして
我もいと心なやましく。いかなるべきにかとなん覺ゆるどのたま
ふ。

女房

何か更にれもほしものせさせ給ふ。さるべきにこそ萬の事侍らめ。
人にもゝらさじと思ひ給ふれば。惟光れりたちて。萬はものし侍
るなど申す。さかし。さみな思ひなせど。浮びたる心のすさびに。
人をいたづらになしつるかごと負ひぬべきが。いと辛きなり。少
將の命婦などにも聞かすな。尼君ましてかやうの事などいさめら
るゝを。耻かしくなん覺ゆべきと。口がため給ふ。さらぬ法師は
らなごにも。皆いひなすさま異に侍りと。聞ゆるにぞ。かゝり給
へる。
はのきく女房など。あやしく何事ならん。けがらひのよしのたま
ひて。内にも参り給はず。又かくさゝめき歎き給ふと。はのく
あやしがる。
更に事なくしなせと。そのほどの作法のたまへど。なにか。こと

しくすべきにも侍らずとて。立つがいと悲しくればさるれば。
 びんなしと思ふべけれど。今一たびかのなきからを見ざらんが。
 いといふせかるべきを。馬にてもものせんとしたまふを。いとたい
 しくしき事とは思へど。さればせんはいかゞせん。はやればし
 まして。夜更けぬさきに歸らせればしませと申せば。この頃の御
 やつれに設け給へる狩の御装束。きかへなごして出で給ふ。
 御心かきくらし。いみじく堪へ難ければ。かくあやしき道に出で立
 ちても。危かりしものごりに。いかにせんとればしわづらへど。
 猶悲しさのやるかたなく。只今のからを見では。又いつの世にか。
 ありしかたちをも見んと。ればし念じて。例の太夫隨身を具して
 出で給ふ。道遠くれはゆ。
 立待の月さし出で。河原のほど。みさきの火もほのかなるに。

鳥部野のかたなご見やりたるほどなご。物むつかしきも。何とも
 覺は給はず。かき亂る心地し給ひて。たはしつきぬ。
 あたりさへすごきに。板屋のかたはらに堂たてゝ行へる尼のすま
 ひ。いとあはれなり。みあかしの影ほのかにすきて見ゆ。その屋
 には女ひとり泣く聲のみして。この方に法師はらのふたりみたり
 物語りしつゝ。わざどの聲立てぬねおつぞする。寺々の初夜も皆
 行ひはてし。いとしめやかなり。清水の方ぞ光多く見えて。人の
 けはひもしけかりける。この尼君の子なる大徳の。聲たふとくて
 經うち讀みたる。涙残りなくればさる。
 入り給へれば。火取りうむけて。右近は屏風へだてゝ臥したり。
 いかにおびしからんこ見給ふ。恐ろしきけもればはす。いとらう
 たげなるさまして。まだいさゝかゝはりたる所なし。

手をとらへて。我に今一たび聲をだに聞かせ給へ。いかなる昔の契にかありけん。暫しの程に心を盡してあはれにたほゆしを。うち捨てまどはし給ふがいみじき事と。聲もをしまず泣き給ふ事限なし。大徳たちも誰とば知らぬに。あやしと思ひて。皆涙れとしけり。

右近をいぎ二條の院へどのたまへど。年ごろをさなく侍りしより。片時立ち離れ奉らず。馴れ聞はつる人に。俄に別れ奉りて。いづこにか歸り侍らん。いかになり給ひにきとか。人にもいひ侍らん。悲しき事をはさるものにて。人に言ひ騒がれ侍らんがいみじき事といひて。泣きまどひて。煙にたくひて慕ひ参りなんといふ。ことわりなれど。さなん世の中はある。別といふものゝ悲しからぬはなし。とあるもかゝるも。同じ命の限あるものになんある。思

ひ慰めて。われをたのめどのたまひこしらへても。かくいふ我身こそは。生きとまるまじき心地すれどのたまふも。たのもしげなしや。

惟光。夜は明方になり侍りぬらん。はや歸らせ給はなんと聞ゆれば。顧みのみせられて。胸もつとふたがりて出で給ふ。道いと露けきに。いとゞしき朝霧に。いづこともなく惑ふ心地し給ふ。ありしなから打ち臥したりつるさま。うちかはし給へりしが。我紅の御ぞの着られたりつるなど。いかなりけん契にかと。道すがらればさる。御馬にもはかどしく乗り給ふまじき御さまなれば。又惟光添ひたすけてればしまさするに。堤のほどにて馬よりすべりりて。いみじく御心地まどひければ。かゝる道の空にてはふれぬべきにやあらん。更にいみじくまじき心地なんすと。のたま

ふに。惟光も心地まごひて。わがはかしくは。さのたまふとも。かゝる道にゐて出で奉るべきかはと思ふに。いと心あわたしければ川の水にて手を洗ひて。清水の観音を念じ奉りても。すべしなく思ひまごふ。君もしひて御心を起して。心のうちに佛を念じ給ひて。又とかくたすけられ給ひてなん。二條の院へ歸り給ひける。

あやしう夜深き御ありきを。人々見苦しきわさかな。このごろ例よりも。しづ心なき御しのびありきのうちしきる中にも。昨日の御けしきのいとなやましうればはしたりしには。いかでかくたどりありき給ふらんと。歎きあへり。
誠に臥し給ひぬるまゝに。いといたう苦しがり給ひて。二日三日になりぬるに。むげによわるやうにし給ふ。内にも聞しめし歎く

事かぎりなし。御いのりかたに隙なくのしる。祭祓修法なご。言ひ盡すべくもあらず。世にたぐひなくゆしき御有様なれば。世に長くればしますまじきにやと。天の下の人のさわぎなり。苦しき御心地にも。かの右近を召し寄せて。局など近く給はりてさぶらはせ給ふ。惟光心地も騒ぎまごへど。思ひのどめて。この人のたづきなしと思ひたるを。もてなし助けつゝさぶらはす。君はいさゝか隙ありておほさるゝ時は。召し出でし使ひなどし給へば。程なく交らひつきたり。おくいど黒うして。かたちなどよからねど。かたはに見苦しからぬ若人なり。あやしう短かりける御契にひかされて。我も世ににあるまじきなんめり。年頃のたのみ失ひて。心ほろく思ふらん慰めにも。若しながらへば。萬にはぐゝまんとこそ思ひしか。程もなく又立ちをひぬべきが。口惜しく

もあるべきかなど。しのびやかたのたまひて。よわけに泣き給へは。いふかひなき事をはれきて。いみじう惜しと思ひ聞ゆ。殿の内の人。足を空にて思ひまごふ。内より御使。雨のあしよりもしげし。思し歎きればしますを聞き給ふに。いとかたじけなく。せめて強くればしなる。大殿もいみじくけいめし給ひて。日々にわたり給ひつゝ。さまづの事をせさせ給ふしるしにや。廿日あまりいと重くわづらひ給へれど。異なる名残のこらず。れこたりさまに見ゆ給ふ。けがらひ忌み給ひしも。ひとつに満ちぬる夜なれば。覺束ながらせ給ふ御心わりなくて。内の御どのゑどころに参り給ひなごす。大殿我御車にて迎へ奉り給ひて。御物忌にやかやと。むつかしう慎ませ奉り給ふ。

我にもあらず。あらぬ世に歸りたるやうに。しほしは覺ゆ給ふ。ながづき廿日のほどにぞ。れこたりはて給ひて。いといたう面瘦せ給へれど。なか／＼いみじうなまめかしうて。ながめがちに音をのみ泣き給ふ。見奉りどがむる人もありて。御もゝのけなんめりなごいふもあり。右近を召し出で。のぞやかなる夕暮に。物語などし給ひて。猶いとなんあやしき。なごてその人と知られじとは。隠い給へりしぞ。誠にあまの子なりとも。さばかりに思ふを知らで。隔て給ひしかはなんつらかりしと。のたまへは。なごてか深く隠し聞ゆ給ふ事は侍らん。いつのほどにてかは。何ならぬ御名のりを聞ゆ給はん。初よりあやしう覺ゆぬさまなりし御事なれば。うつゝもればはらずなんあると。のたまひて。御名がくしもさばかりにこそ

はと。聞ひ給ひながら。なほざりにころまぎらばし給ふらめどな
ん。うき事に思したりしと。聞ゆれば。あいなかりける心くらべ
どもかな。我はしか隔つる心もなかりき。唯かやうに。人にゆる
されぬふるまひをなん。まだ習はぬことなる。内に諫めのたまは
するを初め。つゝむ事多かる身にて。はかなく人にたはぶれごと
をいふも。ところせう取りなし。うるさき身の有様になんあるを。
はかなかりし夕べより。あやしう心にかゝりて。あながちに見奉
りしも。かゝるべき契にころは物し給ひけめと。思ふもあはれに
なん。又うちかへしつらうればゆる。かう長かるまじきにては。
なごさしも心にしみて。あはれとれば給ひけん。猶くはしうか
たれ。今は何事をかくすべきぞ。七日くの佛かゝせても。たが
ためとか。心の内に思はんと。のたまへは。なにかは隔て聞ひさ

せ侍らん。みづから忍び過し給ひしことを。なき御うしろに。口
さがなくやと思ふ給ふるばかりになん。親たちは早う失せ給ひに
き。三位の中將ごなんきこねし。いごらうたきものに思ひ聞ひ給
へりしかど。我身のはどの心もどなさをればすめりしに。命さへ
堪へ給はずなりにし後。はかなきものゝたよりにて。頭の中將ま
だ少將にもし給ひし時。見うめ奉らせ給ひて。三年ばかりは志
あるさまに通ひ給ひしを。去年の秋のところ。かの右の大いどのよ
り。いと恐ろしき事の聞ひまうで來しに。ものおちをわりなくし
給ひし御心に。せん方なうたほしれちて。西の京に御乳母の住み
侍る所になん。はひかくれ給へりし。それもいと見苦しきに住み
わび給ひて。山里にうつろひなんこれほしたりしを。去年よりは
ふたがりたる方に侍りければ。違ふこて。あやしき所に物し給ひ

しを。見あらばされ奉りぬる事。れほし歎くめりし。世の人に似
 ず物づゝしみをし給ひて。人に物思ふけしきを見ぬんは。耻かし
 きものにし給ひて。つれなくのみもてなしてこそ。御覽せられ奉
 り給ふめりしかこ。かたり出づるに。されはよこたほしあはせて。
 いよくあはれもまさりぬ。
 をさなき人まどはしたりと。中將の憂へしは。さる人やこ問ひ給
 ふ。しか。をこゞしの春ぞ物し給へりし。女にていごらうたけに
 なんと聞ゆ。さていづこにぞ。人にさとは知らせで。我に得させ
 よ。あとはかなくいみじと思ふ御かたみに。いと嬉しかるべくなん
 どのたまふ。かの中將にも傳ふべけれど。いふかひなきかごとれ
 ひなん。とさまかうさまにつけてはぐまんに。とがあるまじき
 を。うのあらん乳母などいもことさまにいひなして 物せよかし。

など語らひ給ふ。さらばいと嬉しくなん侍るべき。かの西の京に
 て生ひ出で給はんは。心苦しうなん。はかしくあつかふ人な
 して。かしこになんと聞ゆ。

夕暮のしづかなるに。空のけしきいとあはれに。御前の前裁かれ
 づに。蟲の音も鳴きかれて。紅葉やうく色づくほど。晝にか
 きたるやうにたもしろきを。見渡して。心より外にをかしき交ら
 ひかなど。かの夕顔のやどりを思ひ出づるもはづかし。

竹の中に家鳩といふ鳥の。ふつゝかになくを聞き給ひて。かのあ
 りし院に。この鳥のなきしを。いと恐ろしと思ひたりしさまの。
 面影にらうたくおほし出でられるは。年はいくつにかものし給ひ
 し。あやしう世の人に似ずあはかに見給ひしも。かく長かるま
 じきなりけり。どのたまふ。十九にやなり給ひけん。右近はなく

なりける御乳母の。すて置きて侍りければ。三位の君のらうた
 がり給ひて。かの御あたり去らず。たほしたて給ひしを思ふ給へ
 出づれば。いかでか世に侍らんとすらん。いとしも人にこ。悔し
 うなん。物はかなげに物し給ひし人の御心を。たのもしき人にて。
 年頃ならひ侍りける事と聞ゆ。
 はかなびたるこそ女はらうたけれ。かしこく人に靡かぬ。いと心
 づきなきわざなり。みづからはかどしくよくかならぬ心なら
 ひに。女は唯やはらかにて。とりはづしては人に欺かれぬべきが。
 さすがに物づゝみし。見ん人の心には従はんなん。あはれにて。
 我心のまゝにとりなほして見んに。なつかしく覺ゆべき。などの
 たまへは。この方の御このみには。もてはなれ給はざりけりど。
 思ひ給ふるにも。口惜しく侍るわざかなとてなく。空のうち曇り

△妙子
 △年
 △人
 △おれ
 △又
 △

△
 △
 △
 △
 △
 △

て風ひやゝかなるに。いといたくうちながめ給ひて。
 見し人のけおりを雲どながむれば。ゆふべの空もむつまじき
 かな。ごひごりごち給へど。ぬさしいらへも聞はず。かやうにて
 れはせましかはと思ふに。胸のみふたがりてればゆ。耳かしがま
 しかりし砧の音を思し出づるさへ。戀しくて。まさに長き夜ご。
 うちずんじて臥し給へり。
 かの人の七なぬか。忍びて比叡の法華堂にて。ここそがす。装束
 より初めてさるべきものども。こまかに誦經などせさせ給ふ。經
 佛のかざりまでれろかならず。惟光が兄の阿闍梨いこたふこき人
 にて。になうしけり。
 御文の師にてむつましくればす文章博士召して。願文作らせ給
 ふ。その人どなくて。あはれと思ひし人の。はかなきさまになり

にたるを。阿彌陀佛にゆづり聞ゆるよし。あはれげに書き出で給へば。唯かくながら。加ふべきこと侍らさんめりと申す。忍び給へれど。御涙もこぼれていみじくはほしたれば。何人ならん。その人とは聞ゆるもなく。かうたほし歎かすばかりなりけんすくせの高さよと。いひけり。

忍びて調ぜさせ給へりける装束の袴を。取りよせ給ひて。

なくくも今日は我ゆふ下紐を。いづれの世にかとけて見るべき。このほどまでたゞよふなるを。いづれの道に定まりて赴くらんと。れもほしやりつゝ。念誦をいとあはれにし給ふ。頭の中將を見給ふにもあいなく胸騒ぎて。かの撫子のれひたつ有様。聞かせまほしけれど。かごとにれちて打ち出で給はず。かの夕顔のやどりには。いづかたにこそ思ひまどへど。そのまゝに

を尋ね聞はず。右近だにれどづれねば。あやしと思ひ歎きあへり。たしかならねど。けはひをさばかりにやごさよめきしかば。惟光をかこちけれど。いとかけはなれ。けしきなくいひなして。猶同じごとすきありきければ。いごも夢の心地して。若し受領の子どものすきとしきが。頭の君にれち聞えて。やがてあて下りけるにやごぞ。思ひよりける。この家あるじぞ。西の京の乳母のむすめなりける。三人その子はありて。右近はこと人なりければ。思ひへたてし。御有様を聞かせぬなりけりと。泣き戀ひけり。右近はたかしがまししく言ひ騒がれんことを思ひて。君も今更にもらさじと忍び給へば。若君の上をだに聞かず。あさましくゆくへなくて過ぎ行く。君は夢にだに見はやとれほし渡るに。この法事し給ひて又の夜。

ほのかにかのありし院ながら。添ひたりし女のさまも同じやうに
て見ゆければ。荒れたりし所に住みけんもの。我に見入れけん
たよりに。かくなりぬる事こたへし出づるにも。ゆゑしくなん。

源氏讀本三終

語釋

○半部頁一……ハジトミと讀む。下部は板張にして上半分を部にした
る窓。○部頁二……格子に似て細かく作れる戸。格子の外に立てし
上に釣りあげ又は押し上げなどして日光雨雪などを覆ふやうにし
たるもの。○御隨身頁二……高位高官の人の外出する時、その護衛の
ために朝廷より賜はれる武官。○忌む事頁四……出家する時に師より
授かる戒の事なり。すなはち佛法の戒律をいふ。○九品のかみ頁四
……極樂浄土にも九等の階級ありて。九品のかみは其上々たる
處をいふ。○褶頁九……シビラと讀む。裳の上に重ね着くる短き裳。
○さされひて頁一四……前駟なり。供人の馬にて先乗するをいふ。○
御嶽さうじ頁三三……吉野の御嶽すなはち金峰山に祈願を掛けて精進

二
潔齋するをいふ。○なも當來の導師^{頁三三}……なもは南無に同じく歸
命の意にて神佛を拜む時の詞。當來は來世にて後生を善所にと導
き給ふ神佛といふの意。○優婆塞^{頁三四}……ウバソクと讀む。出家せ
ずして佛道に入りたる人をいふ。○長生殿のふるきためし^{頁三四}……
玄宗皇帝と楊貴妃との古事。○彌勒の世^{頁三四}……彌勒菩薩は釋迦入
滅の後數へも盡されぬほど永遠の世に於て出現するといふ佛の
名。千世萬世の後までもといふ程の意。○けいめい^{頁三五}……大切に
周旋奔走する事。○下家司^{頁三六}……家從などの類。○御まかなひ^{頁三六}……
御給仕役。○玉ほこ^{頁三七}……道の枕詞なるがこゝにては道の意。○
瀧口^{頁三三}……禁中を警護する武官。○弦打^{頁三三}……弓の弦を打ち鳴らし
て悪魔を退くる作法。○名對面^{頁三三}……禁中に宿直なる侍臣の名を名
のる儀式。夜半にあり。○どのるまうし^{頁三三}……これも名だいめん

事。○みつばぐみて^{頁四〇}……いたく年老いたるをいふ。○御あそび
^{頁四三}……管絃の御遊。○寺々の初夜^{頁四七}……戌の時にする勤め。今の
午後八時頃。○大徳^{頁四七}……行徳のすぐれたる僧。○祭祓修法^{頁五一}……
祭は神職。祓は陰陽師。修法は僧のする祈禱。○此ほどまではた
だよふたるを^{頁六〇}……四十九日までば亡靈いづくの世界に到るとも
定まらずして。途中に漂ひ居るよし佛説にいへり。

樞密顧問官兼
華族女學校長
正三位男爵
東宮侍講正五位
從五位文學博士
細川潤次郎先生序
本居豐穎先生序
木村正辭先生撰

萬葉集美夫君志

製本既成

和裝帙入美製本四冊
正價金二圓五十錢
郵税金十六錢

皇國、古來ことたきのさきは、國といふ。宜なる哉文物憲章の燦然たるべきものあり、就中萬葉集の如きは實に國文の基礎、國歌の典範なり。身皇國に生れ、日夜國語を談ずるもの、奚く其の本を知らずして可ならんや。然るに其の言辭、頗る古雅にして、讀者解說到困む、而して世に傳ふる所の註釋多しと雖も、或は浩瀚に失し、蕪雜に陥り、之を學ばんと欲するもの、終に卷を閉ぢて浩歎せざるはなし、豈痛恨の事にあらざるや。是に於て近來の註釋の書、概して忘りに本文を改易し、次序を變更し、古書の面目を失ふこと甚し。是に於て文學博士木村正辭先生、數十年來普く數多の異本を求め、先生珍藏の書と併せて比較考究せられ、先本文の誤脱を校訂し、次に本書用字の古音古義を闡明し、遂に一部の註釋を撰述し、題して萬葉集美夫君志といふ。博士は固より國文の碩學にして、殊に文字の學に精通せられ、萬葉集に於て發明する所多く、造詣頗る深きは世の普く知る所なり。從て本書が學者を裨益するの大なる、亦言を待たず。依て今回我國文界の爲めに、博士の許諾を得て之を發刊し世に公にす。庶幾くは方君子、博士が多年の苦心經營と、弊店刊行の微意とを諒せられ、此の寶卷に依りて萬葉學の眞價を領得せられんことを。

發行所

東京市神田區裏神保町六番地

上原書店

明治三十四年十二月一日印刷
明治三十四年十二月七日發行

定價金廿五錢



校訂者 東京市牛込區東横町二十番地 大和田建樹
發行者 東京市神田區裏神保町六番地 上原才一
發行所 東京市神田區裏神保町六番地 上原書店
印刷者 東京市神田區猿樂町二丁目二番地 上村龍之助
印刷所 東京市神田區猿樂町二丁目二番地 信堂



大賣捌

東京市日本橋通三丁目 林平次郎
東京橋區南傳馬町三丁目 目黒支店
大阪市備後町四丁目 吉岡平助
京都市東洞院三條東へ入 村上勘兵衛
名古屋市本町三丁目 川瀬代助
仙臺市大町五丁目 藤崎祐之助
長野市大門町 西澤喜太郎
松本本町二丁目 高美書店

